遊びの把え方に関する一考察

——子どもの世界への接近の可能性——

入江礼子

はじめに

この小論は、母親であり研究者であるという立場にある者として行なう保育の実践的研究の一環として、子どもの遊びをどう把えて彼らに接していくと、少しでも彼らの世界に近づいていくことが可能かを考えていく。

私が何故このようなことを重要であると考えるようになったかと言うと、その第一に、遊びというものがいわば幼ない子ども達の全生活であると言えるからである。特に子どもという存在は、幼なければ幼ないほど大人の助けを必要としながら発達していくものなので、その遊びを大人の側がどう把えるかによって、その子らの生きている世界が把えられるか否かが決ってくる。保育というものは言うまでもなくこのように子どもと大人の相互関係作用である。又、第二に、私の数少ない保育体験から考えてみても、子ども達が成長したとか、より深く豊かに発達していったと感じとることが出来るのは往々にして何らかのきっかけから大人(保育者)の側が、自分の接している子ども及びその遊びに対して興味を持ち、今迄以上に理解と共感を持てた時のように思える。こういう事実に幾つか接してきた私にとって、子どもが深い成長発達を遂げる伏線として、どうしても保育者の子どもの遊びを把える態度や把え方そのものを問題にせざるを得ないのである。このようにすこしでも深く子どもの遊びを把えられるならば、そのこと自体が保育を通じ子どもの側に反映して、彼らの世界を豊かにしてくれるであろうし、子どもと共感出来る土壌がふえれば、保育関係もより深い発展を遂げていくといえるのである。

しかしながら残念なことに、大人は自らの子ども時代を遙か昔に通り過ぎて来たために、子どもとの共感の土壌がひどく狭いことが多い。更に加えて日常生活の能率などを考えることも多く、子どもの遊びを、自分の持つ諸々の枠内で把えて、遊びの本質を見落しがちである。このようにみてくると、子どもの世界に少しでも近づこうと、より深く遊びを把えようと考えても、その壁は余りにも厚いのである。そこでここでは、その壁となることを考えることをも考慮に入れつつ、事例を参照しながら、ここの目的である子どもの世界への接近の方法を模索していこうと思う。

子どもと共なる生活の特徴

子どもと共に日々を過ごしていると、子どもの遊びを楽しく感じながらその場に居られる時と、何となくつまらないと思いながらその場を過ごす時の二つの場合がある。日常の家庭保育の場などでは、保育が生活の中に完全に溶け込む形で含まれているので、時間が区切られている保育の場と違い、保育者が、四六時中緊張して保育を進めることが比較的難しく、惰性にも流されやすい。その結果、何となくつまらないと思いながらその場を過ごすことも多くなりがちである。ところが子どもと、保育者である私自身のお互いの生活が豊かにかつより深くなったと思えるのは、遊びを楽しく過ごした後である。つまらないと思いながら過ごした後にくるものは、子どもとのつながりが切れた感じやら、過ごしている間に子どもに対して否定的な言動が多かったと後味の悪い思いをすることやらである。子どもと二十四時間共に居ながら、近すぎてかえって良い保育関係が保ちにくいと言えるのである。子どもと共なる生活には、このように保育者の側で気をつけていれば、子どもと共にどんな場よりも楽しくつきあえる可能性がある反面、そのような落し穴もあるのである。

以上のような特徴をふまえつつ本論に入ることにしたい。

事例について

ここに挙げる事例は私自身の子どもAの一歳〇か月から六か月までの間の日々の保育生活記録をもとにしている。（Aは女児）尚、記録はすべて思い出し記録の形でとった。

事例と考察

〈1〉保育者は自分の持つ常識の枠を越えた目をもつこと

子どもが遊んだりしたりすることの中には、大人が秩序ある生活を営む上で困ること、又理解に苦しむことが山ほどある。その

時、その秩序を乱されるのがいやさに（これは危険を伴うことが多いので尚更）その枠を全く弛めることなく子どもに押しつけようとすると「イケマセン！」「ダメデスヨ！」の連続となり、子どもの遊びに共感する態度など、どこかへふっ飛んでしまう。ここでは、この禁止の言葉をグッと呑み込んで、子どものする遊びを見守った時の記録から考えてみようと思う。

（例1）コタツの上にのぼること（A　一歳一か月）

●母（私）は夕食の支度をしている。それまで家中をトットと歩き回っていたAは、おもむろにコタツに片足をかけ、何とか台の上に登ろうと必死になる。「のんのー、のんのー!!」と叫びながらもがく。ほとんど泣きそうになりながらも、やっと片足がその上へあがり、満身の力を込めた結果、やっともう一方の足も上がる。すると、今度はヨイショとばかりに立ちあがり、母の方を見て「フフフ」と得意気に笑う。狭いコタツの上を歩き回りながら、その間中大ニコニコ顔である。母は落ちたら危険だなあと思いつつ、その時はすぐ飛んで行けば良いと開き直って見守る。Aはコタツの上で歩き回ることが一段落すると、母が野菜を切り刻んだり水を流したりする様子をみている。近頃のAは、大分アンヨが上手になってきたので興味が高い所へ移りつつある。そこは、いつもと視野が違うので楽しいのだろうかなどと思いつつ母は居る。

この記録にもあるようにAは歩きはじめて一か月。あらゆる所を歩き回り、それが自由自在になると、今度は高い所に興味を示しはじめた。母に抱かれて、Aにとっては上方にあるガス台のおなべの中や洗濯機の中、食器棚の食器、タンスの上の時計などを見ることを楽しみにしていた。当時のAは両親など大人の助けを借りなければ高い所を満喫することは不可能であったのだが、この日からは自分自身で高い所に登り、視野を拡げるという新しい体験を積むことになる。これはAにとって画期的なことである。もう母に助けられなくとも、コタツの上に乗りさえすれば、おなべの中も少しは見えるし、母がトントンと刻んでいる野菜や、水の流れる様子をつぶさに、かつ自力で見られるのである。とは言うものの、Aにコタツに登られるということは、母親から見れば危険このうえないことなのでついつい降ろしたり、抱きあげたりしてしまうし、時には「乗っちゃダメ！」と言いがちである。大人がそうしてしまうのは簡単であるが、そうしてしまうと子どもの楽しんでいる様子をこちらも感じて同じく楽しむという可能性は、はばまれてしまう。このような場合は、子どものケガには最

大限の注意を払いながら、人としての体験を積みつつある幼ない子どもらに対して、単に大人の秩序を押しつけることなく、その楽しみを充分に味わわせることが必要だと考える。

〈2〉子どもの感じていることを感じとろうとすること

保育者が既に大人であるというそのこと自体が子どもの世界への接近をはばむことがある。つまり、大人は自らの子ども時代のことを無意識の底に沈めていることが多く、大人にとっては余りにも当り前でありすぎて、ついついそのことが子どもにとっては新鮮なものであるということを忘れがちである。結局それが子どもといてもつまらなく思えてしまう一因となる。けれどもそれもふとしたことをきっかけに子どもの感じていることを感ずることが出来る。次に例を挙げよう。

（例2）なぐり描きについて（A　一歳〇か月）

●母が書きものをしていると、お昼寝から目覚めたAは、「バアッ」と言って襖の所から顔を出し、母が書きものをしているのを目聡く見つけると、トットットと、母の坐っている食卓へ向って歩いてきて、背伸びして母の膝の上に坐りたがる。坐ると、サッサと母の手からボールペンを捲き取り、「じーじ、じーじ」と言ってなぐり描きをはじめる。母は、ああまたかと嘆息を漏らす。しかしAは、そんな母の様子には頓着なく喜々として描き続ける。その余りにも楽しげなAの様子に母も釣り込まれ、次第にお互いに描くのを楽しむ。

母が仕事をしていようと何をしていようと、幼ない子はこのように好奇心に満ち満ちてその場にやってくる。しかし、母親の側に「あーあ、またなぐり描き」という嘆息が漏れた時、もうそこには画然と母と子の間に心理的な壁が出来てしまったと言える。母は自分の仕事のペースが崩れることを嘆くのみで、子どもが楽しいと感じていることを最初のうちは感じ取れないでいるのである。

ところで「なぐり描き」と大人は十把ひとからげで言うが、果たして喜々として描き続けている子どもにとって、こういう把え方は適切なのだろうか。母親の心に「なぐり描き」と言う概念が住みつくと、そういう目でしか子どもの動きを見なくなってしまうということに気付いた。それに気付かされたのは、Aの余りにも喜々とした様子である。大人から見ればただのメチャクチャ描きも、Aにとっては気持ちの良い（何せ手を自由に動かせるのである）ことであるし、かつ動かしたあとには「軌跡」が残るので

ある。幼ない子にとって「軌跡」が残るということの発見は、過去の発見へもつながるすばらしいことなのではないだろうか。Aの様子を見ても、彼女がふとその軌跡に気付いた時、今度はそっとボールペンを動かし、そのあとをじーっと見て、母の方を振り返ってニコッとしたのである。そう思った時はじめてAのしていることを心から楽しく感じて見守れるようになった。子どもらは、大人が「なぐり描き」と一口に言ってしまうには余りにも「深い多様な体験」を積んでいると言える。

〈3〉遊びの意味を把えようとすること

大人が子どもの遊びを面白そうに遊んでいると感ずるだけでも子どもはより自由に伸々と自己を発揮しながら遊ぶものであるが、その時、或いはその遊びのあとで保育者が、その遊びの意味を把えようとすることで、次に子どもに出会う時に、その関係が豊かになる土台となると言える。

（例3）人にものを渡す（A　一歳〇か月）

●母が夕食の支度に忙しいと、それまで一人歩き回っていたAは屑籠から、ガサゴソ音のする紙（Aのお気に入り）を取ってきて「はいっ、どーぞ」と母に手渡す。母が「ありがとう。じゃAちゃんこれどうぞ」と言って野菜の切れはしを渡すと、嬉しそうに母の足元に坐り込んで、しばらくそれで遊ぶ。

よく経験することだが、母が忙しく立ち働いている時に、突然Aがやってきて、このようにものの受け渡しを楽しむことがある。はじめのうちは、何故こうするのかよく分らなかったが、色々と考えるうちに「人にものを渡す」という大人にもみられることの原初型ではないかと思えてきた。相手をして欲しかったり、その人と近づきになりたい時、大人でも人にものを持ってゆく。持っていくものの種類は違っても大人とAとの間には、共通したこのような心の動きがあるといえる。この小さなAの遊びにはこういう意味が含まれていたのである。こう考えてくると、子どもが何かものを持って来た時には、それを充分受けとめることがお互いの関係を深くするのに重要だと思われる。

（例4）絵本の上にドンドンと足をのせる（A　一歳五か月）

●Aのお気に入りの絵本に『赤いフーセンとぞうさん』と言うのがある。この日も、Aはそれをひっぱり出して「ぞうちゃん」「ふーちぇん」「リボー（りぼん）」などと言いながらみている。ところがそこに出てくるぞうさんが踏み台をのぼってシ

ーソーの上に飛び降りるページにくると、何を思ったか急に立ちあがり、自分の足をその踏み台の上にのせてドンドンドンと足を踏みならし「ハハハ」と笑う。母は一瞬自分の目の前でおこったことが信じられず唖然としてその様子をみている。まあ待てしばしとばかりAのするにまかせていると、今度はフワフワと飛んでいるフーセンの出ているページを開いて、そこからまるで本物のフーセンを手でつかむような格好をしてつかむとクルッと母の方をむき「ハイッ」と言って渡してくれる。母が「フワッフワッフワッ」と言ってフーセンがゆれているかのように手を動かすと、それをみて、とっても満足そうな表情をする。

ともかく、急に本の上に乗ってドシンドシンと足を踏みならした時には驚いてしまった。大切な本の上を踏むなんて、何と言うことをするのかと思いかけ、Aのしていることを止めさせようかと思った。しかし余りにも真剣なAの様子は、私にそのようなことをする隙を与えなかった。次にAがしたフーセンをつかむような格好をみて、私は、はじめて何かのつもりがあって本の上に乗ったのだと気付かされたのである。Aは単に本の上に乗ったのではなく、「踏み台」に乗ったのである。絵本の踏み台は、その時のAにとっては、本物同然の意味をもっている。これくらいの年齢のAにとっては、絵本はただ「見」たり「読」んだりするものではなく、行為を誘発する遊具そのもの（もっと言えば、そこに示されているもの自体）であったのである。以後気をつけてみていると、Aは絵本の中のすべり台を実際本の上に乗ってすべり、ブランコに乗り、御馳走をおいしそうに食べたりする。要するに「絵本」は「本」ではないのだ。この遊びは、ごっこ遊びよりその中に没入している。そういうことがかなりはっきりしてきた時、大人の考える「本」という枠でAのしていることを止めなくてよかったと思ったのと同時に、ちょっとじっくり遊びをみてその意味を考えると以外におもしろいことにつきあたるという感を深くしたのである。

おわりに

子どもが深く豊かに発達していくための土壌として、共感者がそばに必要であることは周知の事実であるが、保育者（親を含む）即共感者たり得ないのが現実である。その現実をすこしでも打破するため、子どもが感じ考えている世界に近づくような把え方を模索してみた。このようなことを考えの基本において、これからも子どもの遊びを把え、見続けたいと考えている。